

第4回 佐倉市におけるこれからの学校のあり方懇話会

日時	令和7年3月26日（水）午後3時00分から午後5時00分まで
場所	議会棟 2階 第3委員会室
出席者	○出席委員 古賀 毅委員、定野 司委員、辻 太久郎委員、宮本 正教委員、石田 加奈子委員、岡島 由夏委員 以上 6名 ○事務局 緑川教育部長、宮崎教育総務課長、村上学務課長、榎本指導課長、舎人社会教育課長、神成教育センター所長、新川副主幹、伊藤主査、大野主査補 ○傍聴人 1人
配付資料	・次第 ・資料1 これまでの議論の振り返りと基本方針の構成案について ・資料2 時代の変化に対応した最適な指導・学習に関すること
議事	① これまでの議論の振り返りと基本方針の構成案について ② 時代の変化に対応した最適な指導・学習に関すること

1 開会

2 議事

【議長】

それでは次第に沿って進行してまいります。

本日、次第にありますように議事が2件あるのですが、事務局から内容的にひと続きになっているため、一括して説明したいという申し出がありましたので、そのように進めていただきと思っています。それではよろしくお願いします。

～議事① これまでの議論の振り返りと基本方針の構成案～

～議事② 時代の変化に対応した最適な指導・学習に関することについて～

【事務局】

（資料1・資料2に基づいて説明）

【議長】

どうもありがとうございました。

今日は幅広く、かつ多岐にわたるのとですね、もう見ておわかりの通り、学校教育の本体の話になっておりますので、この場のみならず世の中でこの種の議論をするときに難しいのは、この教育のプロといいますか、学校の教員サイドが見ている話と、一般社会の方々が見ておられる、考えておられることの間のずれというよりは、多分フロアが違うっていうかですね、これから市民委員の方にはその目線で質問していただきたいですね、「これ、何の意味ですか、意味わかりません」って。私はこれのプ

口なので、この話をいつもやっている人なので、何でも答えられます、国の悪口も言えるし、国の言いたいこともちゃんと国の立場でご説明します。

それともう一つはですね、ここの会議の場におられる先生方がいわゆる校長級の方々ですので、本当はですね、一般の先生、教諭の先生方で今教えておられる方の感覚っていうのもちょっと本当は欲しいところ。つまり、行政はこう言うけれど、その通りうまくいかないんだよっていうところが絶対にあるんですね。その現場の苦慮みたいなこともあるし、おそらく教員って世代の幅もあるので、50代の先生と20代の先生なりたての方ではこなせる量も違うので、持っているスキルも違いますから、そういう違いもございます。

逆に ICT の話になりますと、長くやっておられる先生がむしろ苦手だっていうこともあってですね、今デジタルネイティブ世代みたいな人たちが、インターネットネイティブとかデジタルネイティブの世代が先生にもう既になっておりますので、そういう世代の方にとっては、もうわけのないことっていうのも結構あるかなと思いますね。だから、そういう意味でのギャップもいろいろあるかなというふうに思っています。

私の方から最初にですね、何か大学の講義をするみたいで恐縮なのですが、事務局の方から説明もありましたけれども、学習指導要領のスケジュールについてお話をいたします。

いただいた資料2で、4ページをもう一度ご覧ください。ともかくこの学習指導要領なるものに、学校は縛られます。これは国公立私立を問わず、学校教育法に定める学校は、これに沿って教育を行わなければいけません。これに従わなくていい学校は、大学と高等専門学校だけです。他ですね、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・義務教育学校・中等教育学校・特別支援学校はこれに拘束されるということでございます。10年をめぐりとありますが、ここのところのサイクルは9年になっております。最近の動向で言いますと、その次のページの5ページ以降に記されている、現行の学習指導要領というのがございまして、これは今ですね、小学校・中学校・高等学校、幼稚園もそうですけど、全ての学年で今一斉に適用されております。これが平成29年、西暦で申しますと2017年に告示されました。高等学校は1年遅れで平成30年、2018年に告示されています。さっき私が冒頭で申しましたように、その高校の新課程まで学んだ世代が今度大学1年生になるということで、要はこの3月、この時点でようやく全ての生徒さん児童生徒が新課程、現行課程で学んだということになるわけですね。今の大学1年生、つまり昨年卒業した人たちは、一つ前の学習指導要領で学んだ世代ということです。

33ページまで進んでいただけますでしょうか。33、34ページに載せていただいているのが、これも先ほどご紹介ありましたように、次の学習指導要領を作っている作業に入っております、その中身になるだろうというところです。もう少し詳しく申しますと、学習指導要領は文部科学大臣が告示するというものです。これは一種の法令で、故に拘束力がございます。その告示をするときにどうやってやるのかというと、今我々がやっているみたいな審議会みたいなことを通して、意見を集約していつて、2年かけて審議をしまして、この内容でいきましょうということで、文部科学大臣名で告示をします。今がどの段階かというと、文部科学大臣が、中央教育審議会に諮問をしました。これは何かというと、次の学習指導要領、向こう10年間の教育内

容をどうしようかっていうお尋ねをした、お諮りをしたというところです。中教審の専門の先生が、いろんな業界の方とかですね学者さんとか、経済界の方いろいろいらっしゃるのですけれども、そういうところで内容を審議してやるのですが、ここに載っているのは、これは文部科学大臣が示したものの、文科省としてはこう考えるのだけ先生方がいかがですか、っていうふうにこの内容の中教審に示したのです。これは種明かしをすると、もうほぼこれで決まります。つまり、2年間のこういう議論はあるのですけれども、もちろん修正もありますけれども、方向は文科省がどうですかって諮問した時点でもう大体固まって、それを権威付けるために審議があるみたいな感じがどうしてもあります。今までのスケジュールですと、9年ということになりますと、2017 ですから 2026 年、来年の 3 月、今から 1 年後に告示に向けたスケジュールが多分煮詰まってくるかなというふうに読んでおります。告示されてから中 2 年ぐらいの周知期間を置いて実際に始まりますので、すぐに切り替わるわけではありません。ただ、小中学校に関しては、学習指導要領が始まるって言った瞬間に全学年が一斉に切り替わりますので、小学 1 年生から 6 年生まで、中学 1 年生から 3 年生まで変わると。高等学校だけは学年進行で進むという、そういう違いがあります。ですから、我々の会議で難しいのは、今日この話をするときに、まだ諮問の段階ですので、大体こういう方向かなというところはわかるのですが、より詳しいのは、今やっているやつなのですね。前の学習指導要領の方でご説明いただいているところなのですが、それを基に議論しちゃってもですね、もう終わるのです。これから始まるのはどうなるかまだこれ以上は見えてこないという段階なので、どうしようかってことでございます。

33 ページをご覧ください。社会の状況と現場の学校現場の状況を文科省なりにまとめておられるところがありますが、その下に、顕在化している課題ということが書かれております。これを少し解説いたしますと、①主体的に学びに向かうことができていない子供の存在。現行の、つまり今実施されている教育課程で、主体的対話的で深い学びというのが中心に据えられました。これが、前の方の図解の 3 点で示されているものです。主体的・対話的で深い学びというのは今の学習指導要領の非常にトピックだったのですが、文科省自身が認めているのは、主体的になりきれていない、つまり方向は正しかったと思うが、それがうまく果たせていないという認識でおられるということです。ちょっと読みますと、学ぶ意義を十分に見いだせず、主体的に学びに向かうことができていない子供の増加。これは本市におけるこれからの議論に関わってきます。つまり、何のための学びなのかを共有するっていうことが中心にもございました。

二つ目、不登校児童生徒、特別支援教育の対象となる児童生徒や、外国人児童生徒、特定分野に特異な才能のある児童生徒（ギフテッド）、こうした児童生徒への支援の充実とともに、多様性を包摂し、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題である。つまり、これがうまくいっていないということです。多様性というキーワードがある通り、多様になっていない。だから学習支援がシンプルになりすぎていて、我々もいつもここで議論することですけど、なんかパターン化していますみたいなことがあって、そうなればなるほど、もう昔に比べて相当多様になっているので、そこに対応しきれない。前回、委員の実践のご報告もありましたけれども、それだけ見て

も大変ですよ。個別に対応するっていうのは言うほど簡単ではないということがわかります。にもかかわらず、人が少ないし専門家も少ない。

三つ目、これらに向き合うことは、「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却するとともに、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させ、分断や格差の拡大を防ぎ、共生社会を実現する観点からも重要、というふうに指摘されています。最近の文部科学省にしては妙にリベラルなことをおっしゃっているのですけれども、ここで私が注目したのは、その鍵括弧がついている二つのキーワード、「正解主義」「同調圧力」です。今回これを出してきたのは、危機感だろうなというふうに思います。先生方はもうだいぶ前からこれはお感じになっているのではないかと思いますけど、やっぱり私なんかでも、「先生、結局正解は何なのですか」というところにすぐ来るんですね。だから学びの仕方が、試験で点数を取るとか、正解を出すということが唯一の目的に実質的になっていると、それでスコアを取れば、褒められるし自己肯定感も上がるので特に問題なしだし、教員側としても、点数取ったね、正解したねって、それは褒めるしかないのであれなのですけど、今度は不正解を恐れる、不正解になりそうなことを恐れる。だから発言も質問もしない、僕が間違っていたらどうしよう、みんなの足を引っ張ったらどうしようと。いや本当は、不正解とか間違いとかウロウロしているのを共有した方が遥かにみんなの学びになるのだけれども、それをもう抜けられない。そこに同調圧力というのがありまして、いじめのプレッシャーもあったり、型にはまらないとまずいのではないかっていう自覚があったり、なんとなく大人の側もですね、先生も親も、無難に卒なくっていうようなところを暗に求めているのだろかっていう反省を込めてあります。ピアプレッシャーと言うのですが、同調圧力というのは大人でもございますし、日本社会の特徴として従来から言われていることであります。これがなぜ文科省の危機感に表れているのかというと、現行の指導要領のときからそうなのですけども、率直に言って国際社会における日本の地位の低下、特に経済力の低下です。これを推してくるのは中教審でも財界経済界のメンバーなのですね。つまり、アジアに負けるわけですよ今、日本の企業が。喋れないし、主張できないし、ネゴシエーションできないし、調整することもできない。優秀な成績でいい大学出ていてもその程度、だから割と工業技術力を持っていたとしても、それをうまくアピールすることができないというようなことがあって、ご存知のようにもう今アジアの中でもかなり後ろ、後塵を拝しているような状態になっております。そのことに対する危機感が経済界は相当おありになって、安倍政権のときからですね、ずっとここに中教審などの場でそれを主張しておられました。一見すると、教育の問題と経済の問題とは遠いように思われるでしょうけれども、ゆえに我々というか一般社会の側は、そんなことを言われても、うちの子供と関係ないでしょって話になるのですけども、長年これでやってきた、正解主義とか同調圧力でやってきたっていうことのツケが回ってきているという認識で多分おられると思うのです。ICT活用も同じでございまして、ICTはもうもはや不可欠でしょうね、のりとかハサミレベルの話になっているのですが、日本の実情はどうなのかと申しますと、ご存知のように、今、小さい子供でもみんなスマートフォンを持っていて、耳になんか埋め込んで歩いていますし、ああいうのを触らせたなら大人以上にできますが、遊びしかできない。つまり、生産活動とか学習活動にICTを使う能力は著しく低い。だから、遊びや娯楽や消費行動、例えば買い物をしたりとかですね、通信をしてSNSをしたりとか、YouTubeをしたりとかいうことはもうみんな誰でもできるが、ゲームももちろんする人はする

のでしょうけれども、それを使って生産活動とか創造活動するっていうことになる
と、全くできないし、本来は、インターネットであれば、遠隔の人でも、あるいは言葉
や言語の違う人でもいくらでも距離を縮めることができるっていう、そういうプラン
だったはずなのに、SNS で見えてわかる通り、いつものメンバーと閉じているのです
ね、むしろ。で、フィルターバブルと申しまして、自分の好みのような情報の中に包
まれてそこから出なくなっていて、そして、エコーチェンバーというのですけれども、小
さい部屋で、エコーですから響き合う、いいねいいね、そうだねそうだねっていう。
デイリースポーツを読んでいると、毎年阪神タイガースが優勝するような記事になっ
ているのですけれども、要するに、書き手も読み手も全員阪神ファンなのですねあれ
は。もっとその狭いやつです。そういう中でやっていて、今の分断されている某知
事の問題とかですね、トランプさんの問題とかもみんな多分そこに繋がるのでしょ
うけど、そういう状況も出ている。そのことに対する危機感っていうのはやっぱり相当
あると。それで世の中良くなればいいのですけれども、相当劣化して分断していくの
ではないかということが、この三つ目に書かれていると思います。

真ん中の二つ目、②学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ば。この見出しからわ
かるように、現行の学習指導要領、つまり主体的・対話的で深い学びの方向は、多分
合っている、正しい。しかしながら浸透がしきれていないということです。読みます
と、習得した知識を現実の事象と関連づけて理解すること、概念としての知識の習得
や深い意味理解をすること、自分の考えをもち根拠をもって明確に説明すること、自
律的に学ぶ自信がある生徒が少ないこと、などに依然として課題がある。というこ
とでございます。ちょっとこれ難しくて、概念としてっていうところがあって、平たく
言うと 3.14 じゃなくて π にするよみたいなことなのですけれども、特に小学校高学
年から中学校に入りますと、急速にどの教科も概念化が進んでまいります。高等学校
になると、もう概念そのものの世界になってまいります。よく児童生徒が聞くのは、
「先生、そんなことを勉強して何の役に立つのですか」っていうようなことを大体言
います。特に自分が苦手な分野については、そういう発言をします。大人はそれで
どうすればいいんだろうと思うのですが、要は成長していくにつれて、直接役に
立つことはどんどん減って行って、ほぼなくなってまいります。その代わり何か
っていうと、概念化を一回しないとですね、抽象化し概念化しないと一般化でき
ない、つまり、あらゆる場面で役に立てなければいけないので、個別の場面じゃ
なくて、例えばセブンイレブンでバイトのスキルを教えてもらったならセブンイレ
ブンでしか働けないわけですね。それでは困るので、もっと店舗一般で役立つスキ
ルとか、時代が変わっても状況が変わっても、今だったらおそらくレジの扱い方
とか自動になって変わってきましたよね、それでもできるとかね。別の業種でも
できるっていうような、そこに持っていくのが必要です。何故ならば、大人とし
て生きていく時間ってものすごく何十年も長くて、その間にまた社会は変わっ
ていきます。今すぐ役に立つようなことを学んでも、それはすぐに役立たな
くなります。特に ICT なんかそうで、今のソフトの使い方を学んでもす
ね、そんなの 5 年も持ちません。そういうことがありますので、一つそれを
俯瞰して概念として捉えるっていう力が絶対に必要ということ
です。

またグローバルの世界とかですね、先端技術の世界を学んでいかないと困るわけ
ですけれども、それは児童生徒の視野とか好みとか、興味関心とか。経験の外側に
あります。身近なものと結びつけつつも、自分の想像力の中に今まで出てこな
かったよう

なことを学んでいかなければいけなくて、その時に一種の足場として、身近なこんなことあるよねっていうことと結びつけて入るのが基本なのですが、あまりやりすぎると、まさにそこでしか役に立たない知識になるっていうジレンマが、おそらくあります。だから上手に教えているつもりの先生でも、生徒の関心を引いて、身近なところで結びつけて知識をうまく落とし込んだね、でもその先がないっていうケースはしばしばあるわけです。自分自身の反省も込めて。

二つ目ですが、子供の社会参画の意識、将来の夢を持つ子供の割合等についても、改善傾向も見られるものの、国際的に見て低い状況ということですかね。社会参画って難しいですけど、例えば手応えみたいなものですかね。自分は社会に生きているっていう手応え、関わっているぞっていう手応え。これも言いたいこといろいろあるのですが、例えば、選挙に行けみたいな話しかししないのですよ、国も先生たちも。今18歳選挙になって一層それが強くなったのですが、選挙に行くか行かないかじゃなくて、もっと言えば政治じゃなくて経済に参画するってことで、だってコンビニで買い物しているじゃないですか、スマホの充電しているじゃないですかと。もう既に生きているだけで経済に参画しているのですね。その繋がりの中で、国語・算数も社会も理科もあるよっていうその話なのですが、そこに学びの意味を見いだすににくいというところがあるかと思います。将来の夢についてもあるかなと思いますけどね。自己肯定感が概して低い、というふうに日本の生徒については指摘があります。

③デジタル学習基盤の効果的な活用で、これだけ次元の違うような話ですが、デジタル学習基盤は、一人一人の良さを伸ばし、困難の克服を助ける大きな可能性を秘めているが、効果的な活用は緒に就いたばかり、方向はやっぱり間違っていないくて、この先進めていかなければいけない。いかんせんスピードが遅いっていう、そういう認識だろうと思います。我が国のデジタル競争力は国際比較でも低位であり、デジタル人材育成強化は喫緊の課題、先ほど申した通りですね。デジタルの力でリアルな学びを支えるとの基本的な考えに立ち、バランス感覚を持って積極的に取り組む必要があるということです。今度法令変わって、デジタル教科書がサブではなくて教科書そのものとしての位置づけ、法的な位置づけを持つことになりますので、今までは紙の教科書があってそれを支えるものとしてデジタルもあるよって話だったのですが、デジタルが本体になりうるという道筋が開きました。まだ抵抗している人がいて、紙は残さなきゃいけないのですが。普通に考えてみてください。子供の時からデジタルいじっている人がですね、急に紙を渡されてこれで学べと言われて普通に学べますかと。5分10分のYouTube動画に慣れている人が、50分の授業を聞いて、それで学べますかって話なのですね。学んでもらわなきゃ困るのですが、その間がなさすぎます。そうすると学校教育が信頼を失ってですね、学校の先生に聞くよりもChatGPTに聞こうっていうふうになります。前はGoogleだったのですが今はGPTに聞こうというふうになります。だからまさに喫緊でこれをうまく取り込んでいかないと、公教育そのものがまずなくなってくると、人々から信頼されなくなるということが、もうすぐそこまでやってきているというのが私の考えているところです。

長々と説明しましたが、そんなに外れてないつもりではいるのですが、これ大学の授業だと今の話を大体5回分ぐらいでやるので、かなり大急ぎですいません。

ご発言ご質問、ご意見をよろしくお願いいたします。今日事務局の方からもぜひいろいろとご発言いただければと思います。

【委員】

頭在化している問題のところを見たとき、本当にもうまさについて感じで思ったんですね、どれも。学ぶ意義を十分に見いだせないっていう現状だけを取り出すと先が見えないですが、なんで学ぶ意義を十分に見いだせないかという、本当にただ学びたくないから学んでいないというただそれだけの現状という感じはします。子供達は、こういうことがしたいと思ったらそこにまっすぐ進んでいく力は大人以上にあると思っています。ドッジボールをしたいと思ったら走って運動場に行くとか、そういう何かをしたいと思ったらその力はものすごいですけど、50分の授業を教室の中で、前にいる先生をずっと見ていないといけなとか、じっとしていないといけなとか、話を聞いてないといけなとか、have toの世界にいます。これからの時代はどんどんやりたいことをやっていくのだから、大人が最近言われ始めて子供たちにも言うのだけど、大人がしてないと、逆に子供たちもそんなことしても大丈夫？っていう感じで二の足を踏んでいるっていうのがすごくわかりました。大人が学んでいる家は、もしかして子供も勝手に学ぶと思うのですが、勉強ってやらされている感がずっとあるみたいで、主体的に学ぶっていうことの子供が増加している本当の何かそこを初めにクリアにしていけないと、どんなことを、新しいことをしたとしても、なんで学ぶ意義十分に見いだせないのっていう、その根本に焦点をまず当てた方がいいのかなっていうのを思いました。

次に、この前もお話を聞いて、私が想像している以上に多様性が今すごいっていうところなんですけど、経済から見ると、もしかして20年後、今は日本人の社長が海外の人を雇って、アジアの国とか、アフリカ系の国の方を就職させているような状況だけど、20年後とか逆転するだろうなと個人的に思うのですよ。だって彼らは二か国語喋れるわけですし、多分体験としては、私達が日本語しか喋れない中で、全然違う価値観の中で生きている、だから逆にそういう子たちの可能性も、日本人の子たちと一緒にレベルアップしていけばいいので、そこを問題っていうよりは、可能性みたいな感じで受け止められたらいいなって思いました。あと、正解主義っていうのは、今までこんなに正解主義やっていて、同調圧力やっていて、もうここから抜け出すのって本当に時代がガラッと変わらないと難しいなってすごい思っていて、道德でさえも答えが決まっているような状況で、子供たちの道德心って道德の授業では学べないというか、目の前にいる人にどれだけ手を差し伸べられるかとか、そういうところに学びがあると思うと、教室の中を越えて何かできる学びがあったらいいのかなと思いました。

次に、デジタルの話なのですが、やっぱり良い面と悪い面が確かにあるので、親の中でも見すぎは良くないっていう、一般的に良くないっていうのがあります。私も含め、携帯であったりパソコンとかないと仕事ができない状況になると、やらざるを得ないというか、それはまあ楽しくてやってはいるのですけれども、子供たちの今自分がやっているゲームと、学校からもらったパソコンのモバイルが全く違う感じで動いていて、ただの荷物なのですね今は。最近、充電は学校でできるようになったのでだいぶ楽になったのですが、ただただ重くて、充電しに家に持ち帰っていても1回も開かないです。私の中学生の娘は、成績は割といい方ですが、未だにGmailって何？とか言うのですよ。学校のタブレットには入っていないから。Gmailを知らないとかね、この社会で、私達大人が使っているものと全然違う使われ方を、この学校では

されているのだなっていうイメージが今もあります。教科書がデジタルになっていったら、またちょっと時代の流れが変わっていくと思うのですが、それをサポートする人が確かに足りないっていうのもあると思って、得意な子は得意でやるだろうし、得意な子が同じ学級の中で教えられる環境とか、小さな先生じゃないですけど、人に教えてまたさらに自分の可能性を感じたりする子とかもいると思うので、この教室の中で、学校の先生がもう本当に足りない状況なの本当にすごくわかるのですが、その中で、子供たちの中でも伸ばせられる環境を作るのがいいのかなと思いました。

【議長】

ありがとうございます。どれも非常に大事なご指摘をいただいたと思います。

最後のところから言いますと、教員もそうですし大人もそうなのですが、大人は何でも知っていて、先生は何でも知っていて生徒に教えなきゃいけないと思っているのですが、生徒の方が知っていることもいっぱいあるのですよね。先生がわからないこともたくさんあるのだけれども、なんかプライドとかね、地位とかが邪魔をして逆向きは許せないみたいなところがあるのですけどね。でも総合的な学習が始まったときに、これはもう同じ方向向いて、ときに生徒が先導して学んでいくのが理想だっというようにことを言われて、なかなかそうはならないですけども、そういうふうになっていくし、例えば、学校の外は、今委員がおっしゃったようなことは結構実現しかかっているのですね。だってできる人は若者どんどん外に出ていっているし、個性を発揮しているし、いつとき日本人の若者ってみんな同じ格好しているよね、流行に弱いよねって言われていたのが、今世界で何て言われているかっていうと、日本の若者のファッション素晴らしいと、個性的で自己表現が上手でっていう、それはもう原宿渋谷行ってみればわかりますよ、急に変わりました。大谷翔平じゃないけれども、新しい世代はもう国境も普通に越えていくことができるようになっていきます。ICTの世界でやっている人は特にそうで、もうとっくにその枠組みを超えているのですが、学校教育がついていってない。そういうことですね。

途中でおっしゃったことで、何のために学ぶのだろうと、意義を見いだせない、学びたくないってことですが、市の方でお作りいただいた36ページのところに、わかる授業楽しい授業っていうようなことがあって、こういうのが基本なのですが、わかるのはね、点数取るためにわかるっていうのがどうしてもあるので、正解のためにあるのですが、楽しいかっていうと、楽しいはずなのですよ。これはね、ちょっと私どもの反省もありまして、教員養成側の問題、私の本業は教員養成ですけども、

「君たち本当に、自分が教えようとしている教科とか中身を面白いと思って教えている？」それとも、「学習指導要領や教科書に載っているから、中3でやるべき内容だから教えている？」って。知らないことをわかるようになったら、楽しいし面白いし今まで見えなかった景色が見えて、なんかこういうことありませんか。あるところと別の話がどこかで繋がってスパークが起きるのですね。火花が散ったりして、あーここが繋がっているのかすごい！っていうそのときの知的な喜びって、ゲームで得られる快感とか、お笑いで得られる面白さとかと次元が違う、何か生きる喜びみたいなところがあるのですね。そこまで持っていかなきゃいけないって、それはさっき言った概念の先になるのですよ。そういうことを、多分、実態・実感としてわかってない人たちが教員になっているのかなとか、現場のあれこれに追われて、うまくいってないのかなっていうのがね、ちょっと見ていて思うところですよ。

【委員】

最近娘がですね、担任の先生が体育の先生なんですけど、技術の授業も教えていて、人が足りないからなんですけど、私は一見大変そうだなと思っていましたが、技術の授業をめちゃめちゃ楽しそうに体育の先生がやっているって言うていて、子供ってそういうところをよく見ているのだなと思ったのですよね。私も自分の学生時代を振り返って、体育の先生が社会の授業を教えているときがあって、その先生は新任の先生だったので、もうただただ黒板に書いただけだったのですけど、自分が覚えている学校の先生で、あの社会の先生はとても楽しそうに授業をしていたなとか、そういう大人を見ると、何か子供ってそこに吸い込まれるというか、違う景色が見えるっていうか社会が広がるのがあるなと思いました。

【議長】

だからやっぱり抑制しちゃいけないのですよね。側を決めてはいけないし、さっきの子供仕様の ICT みたいになっているっていう現状はまずいですよね。

【委員】

もう全くわからなくて、全然今までやってきたことがないというか、意識をしたことがないことばかりなのでちょっと聞いてみたいのですけど、学校の現場の中で主体的に学んでいる姿とか、学ぶ意義を十分に見いだしている姿ってどういう姿なのかなって逆に興味があって、こういう姿が主体的に学んでいるのだよっていうのがあったら、知りたいなと思って質問したいです。

【議長】

私も言えることはあるのですけど、先生方、何か実感として思われていることがあったらぜひよろしく願いいたします。

【委員】

教科とか単元にもよるのですけども、やっぱり自分が見ていてこれが主体的だなんて個人的に思うのは、例えばいろいろ教わったことを元にさらに自分で調べている中で、さらにその子の中で疑問とか好奇心とかが湧いて、さらに突っ込んでいくっていう、そういうサイクルができたときに、ああこれ主体的だ、って思うことは多いですね。ただ、そこまで子供たちを導いたり、呼び水を起こすっていうのが非常に難しいなとは思いますが、でも教師の力量にもよるかな、そういうのが上手な人もやっぱりいるし、教科の特性っていうのもあるとは思いますが、その教科と子供の相性みたいなのもきっとあるとは思いますが、主体的っていうと私のイメージはそんな感じですね。

【議長】

だから、例えば体育のスポーツみたいなことを想像してみると、あの美術とかでもいいのですけど、やっぱり練習の仕方とかではまってくると、自分で工夫して問題意識持って、これだったらもうちょっとうまくできるなっていう手応えがあるじゃない

ですか。今までできなかったことができたり試合に勝てたりするっていう、その種のことがおそらく普通の評価でもあるのですよね。うまくいけばということですけど。

【委員】

さらに質問していいですか。そういうサイクルが起こせる先生っていうのは、どういう先生なのですかね。何が違うのだろうと思って。

【委員】

まさにその教師自身が主体的に自分の教科に責任を持って、責任というかな、やっぱり好奇心とか面白さを見いだして、面白いだろうって言える先生かな、そういう態度で示せる先生かなって思いますね。情熱だけではどうにもならない部分はいっぱいありますけどね。

【委員】

それがまず先ということですね。

【議長】

やっぱり教科書とか学習指導要領の中に答えはないのですよ。それは、そこに表現されているものは世の中にあるので、そこを拾ってくることができる人がやっぱり欲しいのですよね。

【委員】

決して教師だけに求められる力ではないと思うのです。同じことを教師が熱量持って伝えても、すごく響く子もいれば、なんだ、それぐらいかっていう子もいるのですね。なので、伝えたことを受け取る側の興味や関心にもよるのかなって思うのです。国語の授業をした後に、勧めてもいないのに図書室にワーンと走り出す子。生活科の授業の後に、虫かごを持って休み時間にグラウンドに突っ走っていく子。でも、いつもの自分の遊びを普通に続けている子もいるのですよね。なので、伝えることと、受け手側の波長が合うっていうこともすごく必要なのではないのかなと感じはしています。ただそこに逃げるわけではなくて、そういう子たちを1人でも多く生み出していくっていうのが僕らの仕事であることも思っているところではあります。

【議長】

今からどれぐらい、昭和の終わりぐらいですかね、生命の大事さを教えるみたいなのが流行った時期があって、サケの一生っていうよく映像化された教材が当時あったので、あれ面白くないからちょっとひねってみようと思って、変な導入入れてですね、私50代ですけど、私が子供のときには、最近の子供は切り身のお魚しか知らずに尾頭付きのフルサイズのお魚を見たことがない、都会の子供は駄目ね、みたいなことを言われていたのですけど、今の子供は切り身すら見たことがなくて、最初からおにぎりの中に入っている粉状のものしか見たことがないですね。サケの一生なんてもう程遠いところにいて、自分が食べているものと関わりないでしょ、そういうのは、理科でも社会でも何でもいいからもう立体的に学んでみて、私が思ったのは、これは家庭科室に行ったら石狩鍋を作ってみんなで食べようと。何かっていうと、そういう理

科も社会も歴史もわからない人が、子供も多分多いだろうけれども、ご飯作るのが上手な子はいるでしょうと。ここは味噌に生姜入れたりした方がいいとかね、玉ねぎを入れると甘くなるとかね、そんなこと知っている、知恵持っている子もいるでしょう、みんなで食べたら美味しいじゃないと。少なくともみんなで石狩鍋食べて美味しかったっていう記憶だけでも十分じゃないですか。だから今委員がおっしゃったように、いろんな生徒がいるので、受け取り方もそのレベルも様々ですけど、それを承知でいろいろこっちもチャンネル提供していったってですね、番組も提供していったって、いろいろやってみるっていうことは多分できるし、それを求めていると思うのですよ今、学習指導要領でも。

【委員】

続けてなんですけど、今そういう話を伺うと、勝手なイメージとして、中学校にボール投げるわけじゃないですけども、中学校っていいなって小学校の教員は思うのです。小学校ってどうしても担任の先生が国語・算数・理科・社会・音楽・図工・体育ってみんな教えるっていうその中に、自分のね、好きなものとかあれば、自分なんかも担任しているときにインターネットで桜島から火山灰取り寄せて子供たちに顕微鏡で見せたりとかね。好きなものはどんどん追いかけて、それに子供も乗ってくるのです。でも、そんな専門的な楽しさを伝えてくれる教科ごとの中学校の先生って本当に羨ましいなって、そこに子供たちが足を運んで1時間ずつ授業を教われるって、そういう意味で言えば、将来佐倉市にも小中一貫校とか、一つの学校の中にオールマイティーな人がいたり、専門的な人がいたりっていうのはすごく魅力的だなっていうような思いでいます。

【委員】

子供側の方ですけど、子供も何か勉強したのだけど、結局良い点取れないと嫌だって辞めちゃうのですよね。どんどん苦手が増えてくるっていうパターンですよ。うまくいけばいい点取れていいのだけれども、じゃあどちらのタイムパフォーマンスがいいかっていうと、やらない方がいいわけですよ。やって失敗するのだったらやらないで悪い点を取っていいじゃないの、私はやればできるのだから、必ず言うのですよ。実は保護者もそうやって言うのですよね。そういうことをやっぱりマインドセットを変えていかないと、先生が良くても、受け取る子供たちの方もそういう、成長マインドセットって言いますが、自分の成長が楽しい、嬉しい、喜びに繋がっているというところまでいかないといけないです。

ところが、意外と僕ら忘れちゃって、例えばさっき体育の話ありましたけど、運動会やって一等賞二等賞三等賞ってつけるじゃないですか。絶対一等賞の子って誰かいて、頑張っても一等賞になれないのですよ。だけど、例えば100m自分は13秒かかるのだけど12秒になった。これは成長じゃないですか。そういうふうに取り替えていかないと、このマインドセットを変えることができないなっていうふうに思いますね。だから、他の人間と競争するのではなく、昨日の自分と競争するみたいな。そうすると成長していくっていうことだと思うのですよね。

前にちょっとお話をしましたが、うち宿題出さないって言ったらね、宿題無いならどうやって勉強したらいいのですかっていう一つの意欲じゃないですか。それから、こないだ16人の卒業生初めて出したのですけども、卒業のために何か残してお

きたいという男の子が1人いて、何やったかっていうと、彼の企画で2時間の授業を、なんかスポーツやろう、だったらみんなできそうなドッジボールをやろう。まず全校の、全校っていったって69人しかいないですけども、賛同を得るにはどうしたらいいのか、どういう説明したらいいのか、周りもじゃ何協力しようかって言うことができるわけですね。自分たちでやれるということを身につけただけでも、僕はとてもいい2時間だったなと。もちろんその2時間の前準備もあるから、先生方もいろんな手入れたと思うのだけれども、良かったと思うのですよね。ルールをどうやって決めよう、そしたら何言っていたかっていうと、運動苦手な子が多いわけですよ、うちの学校なんかね。そうすると運動ができない子のためにどうしようか、じゃあドッジボール半分にして半分は百人一首やろうっていう話とかね。百人一首も得意な子とそうでない子いるじゃないですか。だったら、上の句下の句じゃなくて、後半はいきなり下の句呼んで、かるた取りにしちゃったらいいいのではないかとかな。いろんなことを、要するに相手のことを思いながら、つまり自分が得意なところだけじゃなくて、不得意な子もいるよね、じゃあそういう子たちも参加できるようにするにはどうしたらいいのかということまで考えていくっていうのが、僕はやっぱりさすが中学3年生だなと。そういうところまで、たった1年の経験ですけど、引き上げることができたっていう、そういった人間が登場したということは、僕はいいことだなって。そういう子供たちをいっぱい作りたいなって思いますね、そうすれば、高校に行っても自分で主体的に対話をして、そして周りにとっても深い学びができるのではないかなと思うのですよね。

なので、うちの学校のモットーですけど、まず好奇心を持ってチャレンジをして、感動するって、感動は他に感動を与えるだけじゃなくて、自分自身も豊かに感動するってことですよね。それがそういうサイクルができれば、今のいろんな問題が解決していけるのではないかなというふうに思いますね。教師だけの問題じゃないっていうところですね。

【議長】

さっきの委員のご発言の中にも先生が、小さい先生に、生徒がそういうのもね、繋がってきます。

【委員】

先生がおっしゃっていた、昨日の自分よりも成長しているとか、もうこれが一番なところかなと。一番そこをクローズアップした方がいいって最近思っていて、私も自分で本を読んだりしたときに、昨日まで知らなかった情報を今日知っただけでもすごい、もう生まれ変わったぐらいすごいことだったっていつも思っているのですね。多分、委員がお勤めの学校の何がいいって、失敗ができる環境があるっていうことだと思いました。今は失敗ができないような環境にある気がして、小4の息子がいつも言うのですけど、間違っって先生に怒られたとか、間違っって怒られちゃうのとか。でも、間違っって怒られてはいいのですよ。多分違う空気を感じただけなのですけど、何か怒られたとかそういうふうに感じちゃって、子供は大人よりも感受性がすごくて、6倍ぐらい感じるって聞いたことあるのですけど、きっと今の子たちは失敗を恐れているというか、失敗ができる環境がなくて、この主体性っていうのが学びに向かってないんだらうなって思っていて、大人になると、あの失敗は今のこれに繋がっていたよね

っていう学びをいっぱい持って、これから何かしようと思ったときも失敗ができるのですが、子供のうちって失敗がもう怖くて、親もその失敗に慣れてないといえますか。まだ低学年の子は特にそうですね。なので、今回失敗できる環境というか、失敗してもいいのだよっていう環境を作れるようなものが、教育の中心にあったらすごくいいのになって思いました。

【議長】

どうするかって話の前に、身も蓋もない社会状況の話をしますと、やっぱり少子化は大きいんですね。そうすると親の方も、7人も8人も子供がいたら、どれか当たればいいぐらいに思うかもしれないし、上のお兄ちゃんから順番に戦力になればいいのですが、一人っ子になってくると、間違っちゃいけないっていうのがあって、無難に行きましょうっていう親のマインドはそこで働いていますよね。だから、それを預かっている教員の側も同じことになってしまって、今の大学生でもよく言うのですが、ね、「合っていますか？」って言うんですね。社会人でも言うみたいですね、「合っていますか？」、って何ですか。これ適切ですか」とか「いいですか」とか言うのはいいのですが、合っていますかって、どういう基準で君生きてきたのって、合っているか合っていないかって、合ってなかったらもう終わりみたいなね。おっしゃるように、失敗できる場がどんどんなくなって、私は学校と社会がもっと地続きになって垣根を取り払って行くべきだというふうに全然思わないんですね。どこかで会議でも話したような気がしますけど、それはね、やっぱりそこに垣根があることによって、社会の論理とは違う学校ならではのゆるさっていうか、ぬるさがあった方がいい。だから安心して失敗もできるし、例えば中学生ぐらいになると、ヤンキーとかツッパリとか不良とかいうやんちゃな子もいますが、同じことを大人がやったら犯罪になったりね、反秩序な扱いになったりすることも、間違えていいわけですよね。そういう紆余曲折って人生の中にあるので、それが許されない不寛容な社会になってはいけないのですが、せめて学校の中ぐらいはありにしましょうよっていうふうに思うし、本来そうだったはずなのですが、やっぱり現場の空気そのものもちょっとハードになりつつあるのかなと。官僚主義的になっていて、先生自身が、教員集団の中で間違いを恐れて校長に怒られるとか、教育委員会に見つけられるとかですね、教育委員会は教育委員会で文科省に怒られるとかですね、そういうようなのがどうしてもありますので、今だと報道されるじゃないですか。教育関係のYahoo!ニュースの乱暴なコメントとか見ているともうすごいのなのですが、学校の先生とおまわりさんには何言ってもいいと世の中は思っているんですね。それぐらいにハードになってきつつあるということで、身構えざるを得ないってことあります。

それと、エビデンス主義になってきて、それって成果ありましたかみたいなことを現場も、特に教育委員会なんか求められていると思うのですが、エビデンス、成果が出たことにしないと、予算も取れないし、事業も継続できないのですが、学校教育でそんなに成果が出るわけがないのですよ。大人になってからの話ですから。そういうね、ゆとりがなくなっているのは確かですね。というのはもう身も蓋もない話です。

【委員】

さっきの正解主義の話ですけど、僕はやっぱり対話が足りなかったなっていうところがですね、どうしても結論を急ぐので議論するのですよ。だから勝ち負けをやりたいがる、だから、あっている・あっていないの、どっちがいいのっていう話になっちゃうのですけども、本来は自分の伝えたいことを伝える、自分の伝えたいことを伝えるには相手の伝えたいことも理解する、相互に理解して初めて議論が成り立つはずなのですけども、いきなり議論しちゃうので、結論早く急いで、はっきり言って納得できないから、決まったのだけど従わないっていうのが悪いサイクルになっているなど。これ実は、大人の世界も今そうなのではないかというふうに思っていて、諸外国のそういうのを見ていてもね、議論して何か決めるのだけど決まった通り動かないじゃないですか。だから納得してないわけですよ。説得されちゃっている、だから嫌だっていう、それを学校の中から変えていかないと僕はいけないなと思うんですよ。相手の事を知る、自分のことを知ってもらうっていう対話をとにかく中心にやっていくべきだと。でも時間かかるのですよね。相手のことを知るまで時間かかる。でも、これはとても子供が成長する上で必要な行為だと私は思いますね、人間関係を作るって。うちの場合、特に人間関係、コミュニケーションの上手な子ばかりじゃない、逆に難しい子たちが多いので、そういったところは注意しないといけないなというふうに思いますね。

【委員】

大人の中も全くそうで、私は主婦のコミュニティを作っているのですけど、これ5年目なのですともう。これの中でも、お互いをまず知るところから始めないと、なんか崩れてくるのですよね。そういう中で5年やっている中で、分断とかも起こったときってそれがもうきっかけなのだけど、さすがに5年もやってだんだん学んできて、やっぱり相手を知って理解するっていうことで信頼関係ができると、安心安全な場になるからこそ失敗していいに繋がるみたいな、このサイクルっていうか順番が、さっきの失敗をしてもいい環境があるとかに繋がっていくのかな、そうすると、だんだんみんなの心が整ってくるのですよね。失敗できる環境に身を置けるから、自分のチャレンジがしやすくなって、どんどん成長していく。多分その成長が喜びに繋がっていくから、心が整っていき、主婦の皆さんは、子供たちにも優しくなって、子供の心が整うと、結構主体的なお子さんになったりするので、さっきの先生だけの問題じゃなくて、家庭の問題とかでもあるのかなと思うと、こういうところから何か必要なのかなというのを今聞いていて思いました。

【委員】

相手のことを理解すると、例えば譲歩ができるわけですよね。譲歩をすると、向こうはありがたいって思うわけじゃないですか。そうすると、今度は私の方が譲歩しようということになって、うまい結論が出てくるっていうところですよ。自分の主張だけしていたのじゃいけないなということを知る、ということだと思いますね。最後は、これは言いすぎかもしれないですけども、空気を読むなって僕言うのですけど、空気読んで自分の意見言わなかったり引っ込んだり、ってすることが日本の社会では良いことだと言われていましたけど、そうじゃなくて、空気読まずに主張できることっていうのはとても重要だと思いますね。

【委員】

その空気を読まないっていうか読むなってことが、同調圧力っていうところになると思うのですが、その対話の中で成り立つのが、簡単に言うとウィンウィンなのですね。学んでもらいたいっていう学校教育側のところがあって、子供たちがこういう感じだったら学びたいっていう多分交わるところがあって、そこにさらに情報が子供たちにはないと、まだ知らないことが多いので、その子供たちの願望をいかに吸い上げて、学校教育がこうありたいってものの、その中間みたいなのところを探していけば、自主性みたいなものを必ずいつかは何か見いだせるのかなと思います。今はこうしたいっていうだけで、こうしたいって子供たちが思っていないのにこうしたいって背中ですっと言っているけど、子供たちはなんかもう逃げたいみたいな感じの構造があって、でも多分子供たちが見えている情報はとても少なくて、形式ばかりのこのパソコンで情報も得られなければ、本当はこの一つの iPad っていうかデジタルなパソコン一つあれば、実はものすごいことを知れるけれども、その使い方はまだ多分やってないと思うのです。最近私は思うのですが、願望が明確にお互いになくなって寄り添えないっていうか、多分私がこうしたいよって思っているけど、相手がこうしたいよって思っていて、その中間を取ることはできると思うのですが、全然思っていない人に自分の願望だけを言ってもなかなかうまくいかないような状況が学校の教育の中ではあるのかなと思っていて、そのためには、子供たちが知る情報ってものがとても大事で、学校は子供たちのことをよく知る情報が必要で、情報と願望が共鳴したところにじゃないとうまくいかないと感じます。

【議長】

そうですね。おっしゃる通りで、スマートフォンみたいなちっちゃい画面じゃないですか今。Chromebook なんかも画面がちっちゃいんですね。ちょっと問題はあって、文字キャパが小さすぎるのですね。そうすると知りたいものを調べて、さっき委員がおっしゃったみたいに、自分で飛びついて深めていくっていうときに、今の子だったら絶対インターネットで調べるじゃないですか。インターネットで調べて最初の1行目だけ持ってくるのですよ。Wikipedia とかで調べて。これが合っているっていうその正解で、そこで終わっちゃうのですね。それは、今 AI がやってくれるのですよ、そういう表面の情報をすくい取ってくるのは。それをまとめることはやってくれるのですね。じゃなくて、その間を繋ぐ部分を、学校とか教員がやってあげて、1段目はもう委員がおっしゃったみたいに、子供自身の好奇心とか知りたい欲とかそういうところがあって、そこに教員しか持っていないその間を繋ぐスキルっていうのをかませないといけないのですが、それが求められているというところだと思います。だから、学校の教科とかその中の教育の中で、それっぽい経験を積ませてあげるっていう、それによって手応えさっきから出ているような、こうやればできる、まさに転用して応用して、こないだやったテーマとか分野とは違うけど、あのやり方を応用すれば、今僕が持っている疑問とか、その先のことが見えてくるかもしれないし、見えてきたら面白くなってくるっていう、なんだったら自分の進路とかね、将来の設計にも繋がってくる、これは理想的なサイクルですね。

【委員】

先程鮭の石狩鍋を食べたって言ったときに、何か学びって、国語算数理科社会じゃない、実はその石狩鍋を食べるのに例えば石狩の歴史を知ったりとか、どういう温度管理でやるかという理科が入っていたりとか、食べて家庭科が入ったりとか、いろんな要素が本当はあると思うのですよね。それが国語なら国語、算数なら算数って時間で区切られて学ぶので、それが自分の人生にどのくらい関わるかなんて考えずに子供たちは学んでいるのですけど、生活に直結するような一つのヒントみたいなものがあると、子供ってすごい想像力があって、何かヒントを与えるだけで考えるのになって思っています。この前ちょっと疑問に思ったのですね、中学校の家庭科が生姜焼きを作るっていう授業で、生姜焼きしか作らないのって聞いたら、生姜焼きしか作らないっていうのですよ。レタスの1枚ぐらい乗るよねって言ったら、いや乗らない、生姜焼きだけ作るって言うのですよ。その授業をするぐらいだったらってちょっと思ったのですけど、生姜焼きを食べるにあたり、どんなものとバランスとったらいいかとか、これに合う副菜を三つ考えよって言って食材を1人ずつ渡して自分で料理作らせるとか、そのような授業にまだなっていないのってちょっと思ったのですね。未だに生姜焼き1個作って、それを給食の前の時間に食べてお腹いっぱいみたいな、家庭科の授業がこんな感じだったら、学習指導要領私はちょっとわからないのですけど、本当に学ばなきゃいけないことをただ先生がやっていたら、子供たちって本当に「生姜焼きってこうやって作るもの」だけで終わっちゃうのですけど、これが自分の生活にどのくらい関わっているかみたいなのが、もうちょっと見いだせるようなふうに持って行ってほしいなって最近思ったのですね。

【議長】

ご自宅の肉じゃがは豚肉ですか、牛肉ですか。

【委員】

うちは豚だったり鶏だったりします。

【議長】

鶏もありますかね。

【委員】

はい。

【議長】

関東は割と豚肉が多いし、居酒屋さんとかでも豚肉が出てくるケースが多いですが西日本は絶対に牛ですよ。カレーはどうですか。ポークカレーとビーフカレーは。

【委員】

いろいろです。

【議長】

ビーフカレーとポークカレーの境目ってわかります？世の中で普及の度合いで。

愛知県と三重県の境目に木曾三川というのが流れていて、東側から木曾川、長良川、揖斐川とあって、江戸時代は輪中地帯で、東海道はそこだけ船で行くのですけど、七里の渡しって言って、それはなぜかって言うと、低湿地なので歩いていけないってことなのですけど、桑名ですね今で言う、そこが境目になっています。戦国時代に長島の一向一揆が起こって、織田信長が丸ごとそこを殲滅したってことでも知られているのですけど、そういうその東と西の境目にあるってことを秘密のケンミンSHOWが明らかにしていました。この話は結構面白くて、私は後で見せてもいいですけど、近鉄線に乗ってですね、三川を通るところをずっと録画してですね、実感としてそういうのを見せたりするのですね。

肉じゃがは日本の伝統的な料理のように思われていますけれども、あれは明治時代に作られた創作料理ですから。肉もじゃがいもも日本にはなかったものですから、あれは東郷平八郎が作ったってというのが一番有力な説でありますね。というのが大体私の枕だったのですね、何かの授業の。去年はそれでお米の話をして、食管法ってもう終わった制度の話、昭和世代がみんな知っているプラッシーっていう謎のジュースの話があってですね、お米屋さんってパン屋さん違って、米はそのまま食えないのになんで米屋という商売が成り立つのっていう話をやって、食管法と、実は自民党政治の闇とかいろんなそういうところに繋がるのですけど、1学期の間そういうことをやって、それはそれで面白いから、知的で好奇心がある生徒はやって、そこに夏休みに自由研究をかませているのですね私は。広げ方は自由ですが、それを全員にLMS

(Learning Management System) で共有して、みんな可視化できるようにデジタルで発表してくださいと伝えました。ある子はドカベンを自分で作って見たと、昭和のドカベンを再現してみた。ある子はそういう知的なプロセスを研究してみた、ある子は米穀店に自分で取材に行って、お米屋さんって今どういう努力をされているのですかと取材をしてきた。それをみんなで共有してコメントをつけて、面白かった、でそこで私は満足していたのですけど、それで夏休み明けたときに何が起こったかという、米騒動が起きたわけですね。急に米がショートして足りないって、店頭になんないってことがあって、生徒からとても尊敬されたのですね。米は重要だっていうのは先生それが言いたかったのだって、違うのですけど、繋がったみたいな話になって、そうすると何か社会科って手応えあって面白いじゃないですか。なんかもうそれで、これは家庭科じゃないからカレーの話はないとかね、こうやっているとなんか面白くないのですけど、なんか学校の先生自身も自分でご飯作らないのかなとかね。買い物行かないのかなと思いつつ、行ったらいろいろ面白いこと見つかるのになって言いながら。今年の新年度の授業の枕はですね、去年ここで議論いただいた最初の第1回のやつをヒントにしましてですね、ご飯を炊く話を持ってきます。ご飯ってどうやって炊くと思う？っていう炊飯の仕組みから始まるっていう、これ社会科の授業です。

【委員】

会長が冒頭、今日は校長職、担任の先生がこの場にいらっておっしゃっていたので、今のような話を担任レベルが聞いていたら、どんなふうに思うのだろうかって想像していたのです。そんなに学校にばかり求めるなよとかね、教師の個人のスキルだけで、本当に対応できるのだろうかって僕は言うのではないかなって思ったのです。2月3月になるともう担任レベルの話では、教科書終わった？算数何ページまで行った？理科の実験どこまで行った？など、もう必死です。学習指導要領の本筋の話

もありましたけど、本当にそこに気持ちがいっているかどうか。もう教科書を終えるだけで必死っていう中で、結論急がないであるとか、時間をかけるであるとか、人間関係作る、子供との人間関係保護者との人間関係、子供に寄り添うとか、学ぶ選択肢を与えるとか、ということが今の実情で、そんなことができるかよってね、担任は思っているのではないかなって僕は想像しながら実は聞いていたのです。なので、もし佐倉市でできることがあるのであれば、アンケートにもありました1クラスの適切な人数、子供や保護者が感じるもの、教師が感じるものってどの辺りなのだろうっていうことが、市としてできるのであれば、やっていくのも大きい課題解決の方法なのかな、小中一貫で小学校の先生のスキル、中学校の専門的なスキルが融合すると何ができるのかなとか、専門的な人材入れていくとかっていうね、主として学校のあり方っていうのが本当に模索できるのであれば、今みたいな疑問とか、こんな授業がついていうものが、もしかしたら実現できるのかなって思いながら、聞いていました。

【議長】

非常にありがたいご指摘だと思います。今の委員のお話にいい筋目をつけていただいたのでちょっと伺いたいのですけれども、今日の資料、先ほどご説明いただいた中でも、小中一貫教育、一貫校じゃなくて一貫教育ってちょっと広くとっておられると思いますけれども、もちろんいい面はいっぱいありますけれども、課題や難しさとかですね、ここは無理なんじゃないのっていうのは、小学校側から見た感触でおありになりますか。

【委員】

いいイメージがありました。

【議長】

私も元々歴史の研究から入ったのですが、やっぱり小学校と中学校って成り立ちが違うので、宗教が違うぐらいに空気が違うところは従来あって、うまく繋がらないところがあるのと、品川区が率先してもう今から30年ぐらい前からですね、接続をやって、一部は義務教育学校に転換しておられるのですが、最大の弱点は5年生6年生でお兄ちゃんお姉ちゃんになる経験をスルーしてしまうっていう、自己肯定感とかリーダーシップが育たないみたいなことが指摘されているのです。そういう問題もあるみたいですけど。もちろんさっきご提言にあったように、子供も少なくなってくるが、教員もそんなに増えるわけではないし、全体に縮小傾向の中で、しかし施設なんかも統合していかなければいけないし、さっきから言っている多様な学びもやらなきゃいけないとなると、一貫教育みたいな仕掛けは、何らか必要だろうとは思いますが、うまく着地できるのかなというところがやっぱり不安ではございますね。

【委員】

確かに、この最高学年として学ぶ時って一番学びがあるなとは思うのですよね。だから、小中一貫になったら専門教科の先生に教えてもらえとか、そういうメリットは私もすごくあると思います。幼稚園でもそうなのですが、最高学年ってやっぱりキッと子供たちも気合が入るようなところがあって、それは大事だよっていう認識

は、小中一貫の学校になったとしても、そこはやっぱりけじめじゃないですけど、つけながら、小中一貫は多分、現実的に少子化が進む中でもう多分避けられないかなと思います。その良い面と悪い面も考えながらも、不安材料としては高学年で学ぶところに、例えば子供たちの成長を一步上げてくれるような先生をつけるとか、ちょっとわからないんですけど、やっぱりうちの子たちを見ても、高学年って何か知らないけど2年ぐらいボンッと成長したような感じがしていたので、その機会を奪うっていうのはちょっと寂しい気もするので、そこはすごく大事だよねっていう認識を持ちながら、小中一貫は進めていけたらいいのではないかなって個人的には思います。

【委員】

足立区で教育長やっている時代ですけど、小学校から中学校って9年間むちゃくちゃ長い、あの子供があんな大人になるわけですよ。これ一緒にするのってとっても難しいわけで、私立の学校での中高一貫っていうのは普通にすんなり受け入れられていますよね。だから昔、中卒で終わってしまう時代の仕組みだったらわかるんですけど、今はほとんどの子供たちが高校行くっていう状況の中で、果たして小中っていうのが一貫でどうなのだろうなっていうのは私ずっと思っていたのです。結論出てないですけど。そのために何らかの仕組みを入れておかないと、小中一貫とか小中の教育って難しいのではないかなって。さっきリーダーが育たないってことありましたけども、うちはたまたま小中一貫やったらめっちゃくちゃ大きくなっちゃったので、4年生までだったかな、分けたのですね。とりあえず校舎を分けた。そうしたらその校舎の最高学年の4年生には、リーダーが出てくるわけですよ。だから、やっぱりそういうふうに分けてしまうと、そういうところっていうのは逆にあるのだなっていう訳ですよ、集団の中で、リーダーっていうのはやっぱり出てくるっていう話ですよ。だからそのところやっぱり考えてどこまで踏み込むのか、あるいはリーダーとかその最終学年だってけじめをつけるってとこですけど、そのためにどんな仕組みを入れておくのかなっていうのは、考えておかないといけない問題だと思いますね。

【議長】

一つ、多分、国の施策もそうですし、佐倉の考え方もそうだろうと思うのですけども、全ての面で学年とかですね、6・3みたいなのを固定するのではなくて、少しフレキシブルに考えると、場面によって。従来も、例えば小学校6年間ですけども、日本の学校教育って学年主義っていうのはもうガチガチにあって、これ世界的にも異例なのですけど、こないだの弥富小学校の複式の音楽の授業なんか見ていてもニコニコしちゃうじゃないですか、こういうのがいいなと思って、いろんなとこに広げたい。ああいうのがね、一般の教科じゃなくて、例えば小学校にはクラブ活動っていうのがあります。それから、委員会活動みたいなものがあります、これ専門用語で特別活動っていうのですけれども、この分野では学校行事もそうです、学年ぶち抜きで仕事を一緒にやったり、その中でちょっとお姉さん役を果たしたりとか、協力し合ったりするというようなことをしますよね。ああいうのがそこにかみ合わせて足りない部分、学年主義の足りない部分を補っているっていうのは従来あったのですね。それからもう一つ、品川区の、いつもは批判しかしてないのですけど、上手にやっておられるところは、6・3をぶち抜くだけじゃなくて、6・3ではなくて、4・3・2っていう考え方で捉えておられますね。だからあの、段差を急角度の段差じゃなくて、そ

ここにスロープを少しかけてあげるようなイメージで、特にその小中の境目にあたる、今で言う小5小6中1のところが移行期って言って、さっき私が言った抽象的概念的な思考ができる、あるいは人間関係が変わるのですね。それまでは席が隣とか、ママ友同士の子供とかね、そういう物理的な近さがきっかけだった人間関係が、趣味とかパーソナリティとか、進路とか、部活仲間とか、そういうので繋がり直すっていう意識がこう来ます、そういう時期なのですね。だからそういう時期に小中の境目が来てしまうっていうのはまずいのではないかっていうのは、これは日本じゃなくて海外からもたらされた考えでした。6・3っていうのは、妥当かっていうと妥当じゃないのですね。ドイツの小学校は4年間です。フランスは5年間です。イギリスは6年間ですけれども、日本の6・3っていうのは、それが始まったのは1947年なのですけども、その頃は第二次性徴の一番標準的な年代、つまり男子の精通と女子の初経が来るタイミングっていうのが、ちょうど6と3の境目ぐらいだったのですよ。だから割とね、その人間の発達に寄り添った感じ、身体の発達に伴って、内面の発達も後になり先になりしてくるという考え方なので。ところがですね、戦後豊かになって食べ物良くなったためにですね、身体の発達が早まったのです。男女ともに第二次性徴が5年生ぐらいまで遡ってきますので、そうすると特に今ほら情報の刺激も多いので、そうするとですね6・3っていう境目にさほど妥当性はない、昔からそうだったっていうぐらいの話なのですね。という現状と制度のずれっていうのがあって、そこを変えられないのであれば、品川区のように少し上手いこと運用するっていう。だから、小中一貫教育っていうこのプランをうまく運用できれば、そこら辺を柔軟にできるし、一旦広い枠組みで決めれば、状況に応じてまたさらに運用し直すっていうことができる。そういう良さがあるのではないかと思っているわけです。

【委員】

この学習指導要領の範囲内で、6・3をその4・3・2に分けたりはできるのですか。

【議長】

品川区は矛盾しないっていうふうに言っています。だから文言上は矛盾しないのですけど、本当に矛盾しないかどうかわからないです。ただ、国はおそらく品川区にやらせたのだと思うのですね。させてみて、一種のパイロットケースっていうか。

【委員】

この隣の八千代のところに小中一貫の学校あるはずなのですよ。ありますよね、確か。私達この前弥富小とか佐倉中とか見学させていただいたのですけど、他の市で、隣の市なので小中も多分何年目かだと思うのですけど、そういう市のところにインタビューしに行くとかは結構いいのではないかなって思いました。

【議長】

ご検討いただければと思います。私も興味があります。難しいのは、最初に仕掛けた人たちっていうのは割とうまく運ぶのですけど、今度はそれがタスクになってきて、惰性化してくるってのはどこでもあるんですけどね。

【委員】

私も散々効果があるのかないのかって責められたので、はい。明確なその効果っていうのはなかなか出せないかもしれないと思いますね。でも、さっきのリーダーシップだとか、あるいは成長期の云々というのには効果がありました。でもさらに出さないとなかなか難しいなと私の直感ですね。

【委員】

小中一貫でいろいろ懸念とか、効果とか、どのようにやっていくべきかという、もちろん検証した上で進まなきゃいけないのだけど、もっと何かシンプルに小学校と中学校が一緒の場所にいてそれでいいのではって思うこともあるのですね。というのは、全く違う文化の者が近くにいるだけで、お互いいい刺激をし合うし、学び合うことがある。それは子供たち同士もそうだし、特に先生たちの学びが絶対大きいと思うのですね。自分も運良く今中学校ですけど、去年までは小学校にいまして、やっぱり中学校からだ小学校教育とか小学校の先生たちへの理解が甘かった、少なかったなって反省しているし、その逆もありきだなと思うし、小1の先生たちとか見ていると、子どもたちを1年かけてきちっとさせるってもう手品を見ているような感じがしますし、中学校は中学校で、小学校で散々暴れたっていうかね、やんちゃな子をおとなしくさせたり、でもそれは子供たちの発達に合ったタイミングの良い指導があったし、もちろん保護者との連携っていうのがっちりできていたからってということもあるし、だから、ただ近くにいるだけで互いの学びはあるよねって思います。あとはやっぱり小学校の先生の苦しいところは、ずっと1年間同じ子供たちというわけだから、そこでボタンちょっと掛け違えて、関係崩れるともう最悪ですよ。子供も先生たちも。そこは本当に大変だなと思うし、それこそ、そういった同じメンバー、同じ担任で1年間過ごすっていうのは、もう本当に閉鎖された1年間を過ごすことになるから、苦しいなと。中学校だと一つの学級にいろんな先生が、教科分の先生が関わるので、結構お互いにフォローしたり、この先生はこう考えているけど、この先生はこう考えているっていう多様な刺激のようなものを受けるチャンスもあるし、だから、ちょっとまとまりませんけども、その物理的に近くにいるだけでも、意味はすごく大きいだろうなっていうのは感じています。

【議長】

ありがとうございます。例えば交流人事とかね、今おっしゃったようなそこら辺だと、市町村の職権でできる範囲だと思いますのであれなのですが、さっき出てきた国の方も、小学校段階での教科担任制の導入ということにおそらく踏み切るだろうと思いますし、多分部分的かなと、国語算数とかその辺から入るのではないかなっていう感じはしております。従来は専科って言って、例えば家庭科とか図工みたいにちょっと特殊性のあるところを中心だったのが、メインの方で来るっていうのは大きなことで、英語の問題もありますし、その発達支援にもなります。逆にですね、今委員のお話にもあったように、小学校の良さっていうのがあるので、中学校になると急に教科の先生しかいなくなっちゃうから、結局生徒の悩みとか、つまりきに寄り添える人って部活の先生か保健室の先生になっちゃうのですよね。そういう意味では、小学校の先生が交流人事で中学校にいらしてその種の支援ができるようになるのかなり良くなってくる、両方いるのがいいというふうなのはあります。それとですね、目下の教

員不足の問題に関わってですね、千葉県のももなく出願が始まる教員採用試験で、中学校免許しか持っていない人に、小学校の併願を認めるようになります。つまり、例えば千葉工大とかで数学の免許を取った人は、小学校の算数の専科になるっていうことが、来年の4月から普通に起こり得ると、それぐらい小学校がもう足りないということと、もう一つは中学校レベルの本式の数学とか理科を教えられる人が、小学校の特に高学年に来てほしいという両方のことがあって、それは遅きに失した感じもありますけれども、それなりの意味のある施策だろうと思います。特別支援教育の問題もそこに絡んでいて、特別支援もなかなか専門家が育っていかないと、要するに特別支援学校教諭免許状を取得できる大学がものすごく少ないので、この辺だと淑徳さんとかね、千葉大とかですけども、そうすると供給が少ないので、多様なニーズにかまないから、普通の免許状の人が臨時で対応しているようなところが多いのですよね。そこをもう少し何とかしたいっていうのはあるかと思いますが。

私も一つ考えているのが、センター機能っていうのがありまして、例えば、学校行事とか、生徒会活動とかそういう部門、あるいは国語教育とか社会科教育とか、体育の教育とかその教科別のものとか、あるいはICT活用みたいな特化したそれぞれの中で、売りになる何かをどこかの小・中学校に集約して、そこにできる先生を集めて、物分りのいい管理職をつけて、佐倉全体のセンター機能、だからそこを頼りつつ、そこと連携しつつ、我が校の教育を推進するってような体制をする。そのためには、この先生は何々第一小学校とか何々中学校の所属みたいに紐付けしすぎずに、もう少し人事をフレキシブルにするということができれば、そうでないと、この少子化プラス先生不足の中でうまく回っていかないですよ。そういう枠組みを柔軟にしていけるだけプランニングと、それをメンテナンスするための力が必要で、ちょっと現場にも負担がかかるかもしれませんがね。そんなことも考えております。

なんかいろいろな話になっていますけれども、最後にご発言を何か、どのテーマでも結構ですが。

【委員】

親だから親としての視点、あとは何か地域で活動してコミュニティ作ったり、公園を使って地域活性化をすることって活動をしているとかそっちの視点で考えると、やっぱり先生とか学校だけに頼るってもう無理、無理というか崩壊しているなと思っていて、だから親も頼りすぎないで、自立するってこと大事かなと思っていて、これ自分はずっと思っているのですが、大人が整うから子供も整うと思っていて、大人にも、その親とか、地域の大人とか、これから親になるだろう大人たちとかにもフォーカスするようなカリキュラムとまではいかないけど、何かそういうアイデアと、こういう学校のものが連携するこれからの学校のあり方って、今話しているこの佐倉市のものに、何かそういうところが入るといいなっていうふうに毎回出るたびに思っています。

【委員】

最後に、この現在の学校現場の状況のところを読んで、「何を学ぶかだけではなくて何ができるようになるかを明確化し」って書いてあるのですよ。何ができるようになるかっていうのを求めていたらこういう指導要領になるよね、って思うのですよ

ね。でも、何ができるようになるかっていう視点で見ると、できなかったらもうやめるっていうふうになっちゃうんですけど、私達生きていく中で長い人生を生きていかなきゃいけないのに、どういう生活を、ライフスタイルを送りたいか、とか、将来何になりたいかっていう質問じゃなくて、どんな暮らし方をしたいっていうそういう問いかけが日常的にあると、例えば満員電車には乗りたくない、パパが大変そうだからって思ったら、その子供は満員電車に乗らない仕事って何があるのかなって探し始めたりできるんですけど、何ができるか視点で教育を考えられてしまうと、本当にそれができるできないで、結局正解を探すような教育になってしまうのかなって個人的には思っています。だから、この教育の最初のところに、どんな生活がしくて、それに必要な学びって何？みたいなふうになると、じゃあこれ学んでおかないとねって自分で勝手に見つけて、勝手にやるっていうふうになるのが一番の主体性かなとも思っていて、その問いかけが、家でもこれは学校の先生にやってもらおうというよりは、各家庭でやるレベルのことだとは思うのですけれども、そこが学校もできて家庭もできて、社会もそれを応援するような形になったら嬉しいなと思いました。

【議長】

どうもありがとうございます。気づいちゃいましたね、その話にね。何ができるようになるのかを明確化するっていうのは、これ国が言っているので佐倉市も入れざるを得ないから入れておられると思うのですが、さっき言いましたように、中教審で諮問に対して審議中でこれから答申は出るのですが、もしかすると削られるかもしれません。つまりここが一番破綻しているのです、論理的におかしいのですよ。全くおっしゃる通りで、今までね、知識の項目があって、国語では算数では何と何を学びますってそういうメニューが書いてあったのです。それは知識の注入になって良くないから、だから何ができるようになる、に言い換えたのです。こっちの方がよほど狭くなるのですよ、もうご指摘の通り。これは専門用語で、コンピテンシーベースっていうふうに言いまして、アメリカの経営学の概念でございまして、要は人事考課です。この社員は、給料の査定で、何と何ができるから、持ち点が何点というふうにしてという、その概念がなぜかアメリカの大学教育に組み込まれて、それが今一般に広がってですね、ヨーロッパも日本も掘り荒らされているところなのですね。複数の有力な教育学者、国にもコミットしている有力な教育学者が、コンピテンシーベースを下げないと学習指導要領そのものが破綻するっていう提言をしております、新聞にもリークされているので、新聞にリークされているってことはおそらく様子を見ている、国がアドバランを上げて世論の動向を見ているってことなので、どうなるかわかりませんが、これがトーンダウンしたり、引っ込められることはないかもしれませんが、抑制される可能性は出てくると思います。やってみないとわからないですけど、今のところの話としてはそんな感じです。

ですから教育委員会としても、おそらく国の動向を睨みながらこころを微調整されていくのだろーと思います。ただやっぱりお立場があるから、国の枠組みを外れちゃいけないので、文言はそういうふうになると思いますけど、問題はこの見出しの下の中身の方ですよ、そこを作っていければという。

事務局の皆様、今日だいぶいろんな話出ましたけれども、何か現場視点で共有を確認しておきたいことってございませんでしょうか。

【事務局】

全く何も答えにはならないのですが、皆様の議論を聞いていて、やっぱり公立学校の意義って何なのかなっていうところを改めて考えなきゃいけないなと思った次第です。正解とか理屈だけを学ぶなら多分ネットでも構わないですし、塾に通わせればそれこそよっぽど効果的に教えてくれるのかなと。そんな中で、何で公立学校ってずっとあり続けているのかなというところ、塾でもネットでもできないことをきちんとやるべきなのかなというふうには思った次第なのですが、とはいえ学習指導要領って国が決めるものがまず第1にあって、教員は県から配置されると、市でできることってなかなか少ないなというところで、このあり方っていうのを我々が定めなきゃいけないところで、そういったところで非常に悩ましいところではあるのですが、今の皆さんの議論を聞いていて、公立の学校じゃなきゃできないことっていうのを中心に据えるっていうのを一つ頭に入れておくべきかと思った今日の議論でした。ありがとうございました。

【議長】

ありがとうございました。公立のっていうキーワードを入れていただいて、多分この基本方針の方に十分にそれを反映できればというふうに思います。

【委員】

僕は公立に行って今私立にいるわけですが、逆にいろんなことがあるのだけど、はっきり言って文科省とかね、何とか県の教育委員会とかね、あるかもしれないけど、ある意味、学校の防波堤になれるのも市教委なので、こないだ実はメディアからちょっと意見が聞きたいって言って、私いま学校にいますのでちょっとそれだけ勘弁してくださいってやったんですけども、やっぱり学習指導要領にない、例えば発展的な学習とかそういうのってあるわけですよ。それは特に私の場合は性教育の話だったり、あるいは主権者教育だったりってあるじゃないですか。どっちかっていうと、少し距離を置きたいっていうふうに今まで思っていたけども、そうじゃなくて現実にこういう問題が起きている、あるいは現実にこの社会がこうなっている、特にもう中学生ぐらいというのは情報としてわかっているわけで、そういったことを実際に即して学習していくっていうのが、僕は非常に興味を子供たちが持てるテーマだと思うのですね。そういうところに学校が取りかかろうとしたときに守ってあげられるのは、市教委だというふうに思いますね。大変ですけど、県教委から多分呼ばれて、私もありますが、そういうこともあるかもしれないけども、やっぱりそういったところから、魅力的な学校とか、教育とか、学習とか、というところがやっぱりポイントなのかなって私はそう思いますね。

【議長】

その2テーマだと私も思うのですよ、政治の話と性の話っていうのは。だからやっぱり石原知事の時代あたりから、ちょっとその辺の反動がきつくて、地方議員が余計なことをまた言って、ネットが余計なことと言って、何か歯止めをかける、行政がかけ続けるっていうのはやっぱり現場に来ちゃいましたよね。だから学習指導要領は結構幅あるのですが、金科玉条その真ん中の真ん中以外ははみ出しちゃいけないみたいな

ことになりがちなのですよね。安全なところで。やっぱり教員もそうですし、教員になりたがる学生もそうなのですけどね、ニュートラルでいるってことが何か正しいと思っているのですよ。ニュートラルっていうのは右も左も右翼も左翼も性教育こういうのもこういう別の理由もあります、その中間に行くのではなくて、初めから関わらないっていう意味でも、無色透明みたいな先生が増えてきちゃう。安全を考慮して、それは私の関係じゃありませんのように。それで逃げるしかない、自分の身の安全を守るために。これを起こしちゃうとね、さっき委員がおっしゃったように、やっぱり大人の姿を見て子供が学ぶので、まさに無難な正解を求めるっていうふうになっちゃうのかな。

【委員】

先程の選挙に行かないって、とんでもない投票率じゃないですか。今の大人がこんなに行かないのに、子供たちどうなるのって思っていて、雨が降ったら行かないとか、意味がわからないじゃないですか、自分の生活にめちゃめちゃ直結しているなんて全く思っていないのですよね、大人が。そのところから本当に考えなきゃいけないし、そういうことを言っている人が周りにいなかったらもう本当に一生行かない人もいたり、学校で習ったじゃん、じゃ行かないのですよね。自分の生活に本当に政治が関わるって思わないと足を運んで行かない。ここがもうこの教育、子供たちの主体性が低いとか、学びに向かうことができてない子供の増加とか、こういうのって全部大人が原因っていう感じがやっぱりしちゃいますね。

【委員】

主権者教育の文科省の会議に呼ばれて話をしたことがあるのですが、今の主権者教育って何やるかっていうと、投票の仕方とかね、民主主義のルール、多数決の原則とかね、そういうのを学ぶわけですよ。最後何となく本物の記載台があって、そこで投票するまねっこして終わるっていう話ですよ、テーマは学校の美化とかね、何とかとかねそういう話ですよ。でも、実際のその政治に関わることっていうのはタブーなわけですよね。何とか党と何とか党の公約を並べて、どれにする。これが本当の政治じゃないですか。それをやるのは非常に嫌がるっていうところです。僕がそれを、守らなくちゃいけないだろうという話をしたことがあって、実際にやっていた中学校もうちでありますし、そういうところ、注意もしなきゃいけないのですよ。選挙期間中にはできないとかね、それはあるのですが、でもそういったことに踏み込めるかどうかっていうところですよ。それは、実は保護者の理解がないとできないですけど。

【議長】

保護者さん全般は支持してくださっても、声の大きな保護者さんが1人いると、っていうのはありますよね。

ドイツがね、割と旧西ドイツから現在のドイツにかけて、ドイツって州によって学習指導要領違うのですけれども、政治教育っていう教科を置いているところが結構あって、日本でいう公民に近いところです。生徒の議論が、例えば右か左か賛成か反対かで割れたときには、先生は真ん中に入ると。同調圧力で一方に偏ったときには、反対側にあえて立つみたいなことをやって、こうやっていくっていうのですね。何が

あるのかっていうと要するにナチスの教訓があって、あれだけはもう絶対取り返しがつかないから、させないぞっていうのがあるのですよ。ドイツは選挙制度が厳しくてですね、全国で5%の得票を取らない政党は、議席取れないのですね。そのドイツで極右が出てきて、今5%余裕で突破して今第2党になって政権取るかってぐらいの勢いになってきているのですね。やっぱり極端になってきている。そういうことが起こってきているので、委員がおっしゃったようになんか形だけやっていてむしろ害が大きくてね、まずいですよね。そういう意味で何かね、さっきの話じゃないですけど、子供たちにちゃんと学べよ、教えないけどねっていう。一応教えるけどそれ以上教えないからね、あとは自分で適宜判断してください、各自で考えてくださいって、各自で考えられないでしょそんな難しい話って。そこら辺がちょっと肝心のところで無責任ですよ。

ありがとうございました。これをまとめてくださっていうのは大変ですけど、まとめてください。はい。また知恵を皆で集めて、少しでも良いものを作ってまいりましょう。

これで一応ですね、ここまでで議論の方は一旦、閉じます。また、事後にですね、いろいろ混ぜましたので、思いつかれたこととかですね、あそこは言い過ぎたとか、疑問に思うとかいろいろあると思うので、事務局もしくは私の方にお寄せください。また次回以降も機会がありますので、考えてまいりましょう。本当はこういう議論の場をもう少しオープンにしていって、市民の皆さんと少しずつ共有できればなというふうに思っております。

それでは事務局の方にお戻しいたしますのでよろしくお願いいたします。

【事務局】

(次回会議の開催などについて伝達)